新板
彩入

御伽名題紙袋

二

へ遠13
1.679
2

1673

御伽名頌紙衣

閲覧

二之巻

第一

金仏傳の酒で碎が廓此方賣踊

親の結末いろけ為ふきめの後世第

四人七大尽乃鼻毛い長町のかり賣

七之付さ孤い別代よ尾を足せるも地

第二

大尽とそろよ揚屋の正月華い為水上大勝

九郎の名階子除こに上る浮世大尽

浅月につる福いうちに豆板

親より揚屋嬉乃情で根引の松山

第三　抱の女房にうと探ぐ懐ゞ㊀李の失念
人の勇代ものゞ代ゞ代ゞる言葉の知居
あげやも押ていそ仕ゞ結ゞ被れ申和
多豊のこれ相ようる中の廓ゞ長勤

第四　さい川よゞ廓り流こ入る粹の勇れ果
清世いかう気ゞ神相ゞそゞ代ゞ被ゞ昔
繁人の繁い形見よ術を来り松ゞ
中和の浮世乃ゞ苦悪の場筋と
ゞゞ

㊀念仏講の酒で酔ゞ廓ゞ度踊
古人ゞゞ乃ゞ天和金ゞ長ゞ清大和ゞ高ゞ宵ゞ
世ゞ業ゞ知ゞる。邪ゞの横ゞ久ゞゞる。傍筋ゞ横金久ゞ
つゞ月ゞゞ一ゞ。久ゞ京ゞゞて一人ゞひゞかゞ芝ゞゞ
祝ゞの相ゞ酒ゞ世ゞゞ布ゞゞ世ゞの堅ゞて乃ゞゞ
決ゞ一ゞて乃ゞゞ。乃ゞ邪ゞの役ゞ去ゞ記ゞと人ゞ知ゞど。新町筋ゞ吸ゞ
町ゞと西ゞ行ゞ。京ゞる中ゞよゞ京ゞ清ゞの祝ゞ吉ゞ記ゞ。天ゞる中ゞ役ゞ
ざゞゞゞ咲ゞゞ。ゞゞの芝ゞ咲ゞゞ。吾町の花ゞも川
口の乃ゞ物ゞ。ゞゞど。ゞ参ゞ堅ゞ極ゞ。ゞ見ゞゞ。ゞ角ゞ邪ゞゞ初
ゞゞ食ゞゞて人ゞる。横ゞの傍ゞ。人のゞゞたゞゞ
のゞゞて。乃ゞへゞゞゞゞと高ゞゞる。乃ゞゞゞゞゞゞゞゞ

雑物ぞ。家まれ極人が宝蔵とて、拙もおのや別に入う。男いとくれてもろも蔵一面ろい大刑よ中れて。外も賜かりどもあのろよと如あ
ひけさ。初そいろや抵ぞ。ぐもあて。二度やい出れ門をもいろて。今
もひけらすぐまれつとおげやの男も海さずいて動ろい。初とぞる
家ろ焼とると。仕ぐらてを。極人耳に入て。ろ仕ぐさふもこれ男
ろしに富人せと。けのそい所のあ仕とるのいかる舟のろ代のゆ人ふひて
怖ぎける。ぞ程よ釈又一代な二万面余ろ山湾て。行年七十五ぞ。
ろろかき釈ろの極よおる。二ろの極久ひ仕とみどろけて。世一の年ろはれ
つきろる七者ぞ釈よ塩ろて書く。仕釈ぞ面物ろて。第ろ七教ぞず
今員ひの出ろる。釈ぞの極ぞ仕ぞ角くろに家を付て。貴ぬ年を
せど。釈の仕とるろめて訪ろぬ分上ろやまぬのいなり。家に答所の
まく。奇業ぬ屋地の入口の極にろ紙ろてろる。仏の面仕も年ど。年

ふろ仕ろろ家ろ分い問者ぞ。ろえと嘆ろ学ろかれて。海ろの釈仕
釈て分をろろ叩ろぞいれろて分ぞ七者の宿と学ぶ色祇ろひのろたろ
ろろの平ぞ。釈きいめてろねろ仕ぞ。分を学ろれい学祇の女ろろて。
意のかいぬと懐ろ。学者の書ろる。雌ろろ人のそ。ひろ仕ろいふ
ろぐ。祇に仕けろと雄に意ろぐ仕ぞて。釈て埋ろれぐぞ会ろの者ろ
釈付て。苦ろろひつろ七。土作の家烟ろいふ仕の。物祇ろひ同ぞ。
人の学ろ釈ぞのろてきゆとろろと。ぬろを男ひつろて。ぞいろ
まひろて分を果ろぞろることひ仕者の悔ろて。ぐるろろ分ぞいろ仕。
学人まろ者ろよい色祇釈付分代ろ色ろひつろひ洗ろろぞ七。誠附
極人人ろ実ぐ祇のろぐろ釈ろと二枚ろひ学ろと人ぐて学ろい一代ろ
枝ろ。極ろ答懐ろ人。秋年ろい合ね二ろ釈の沼ぐ。体ろの釈仕ろさ
ろひてろ人釈ろ釈果ろろ者ぞ出ろ仕ろ。沼ろ。ぞまろて海ろて。濁学

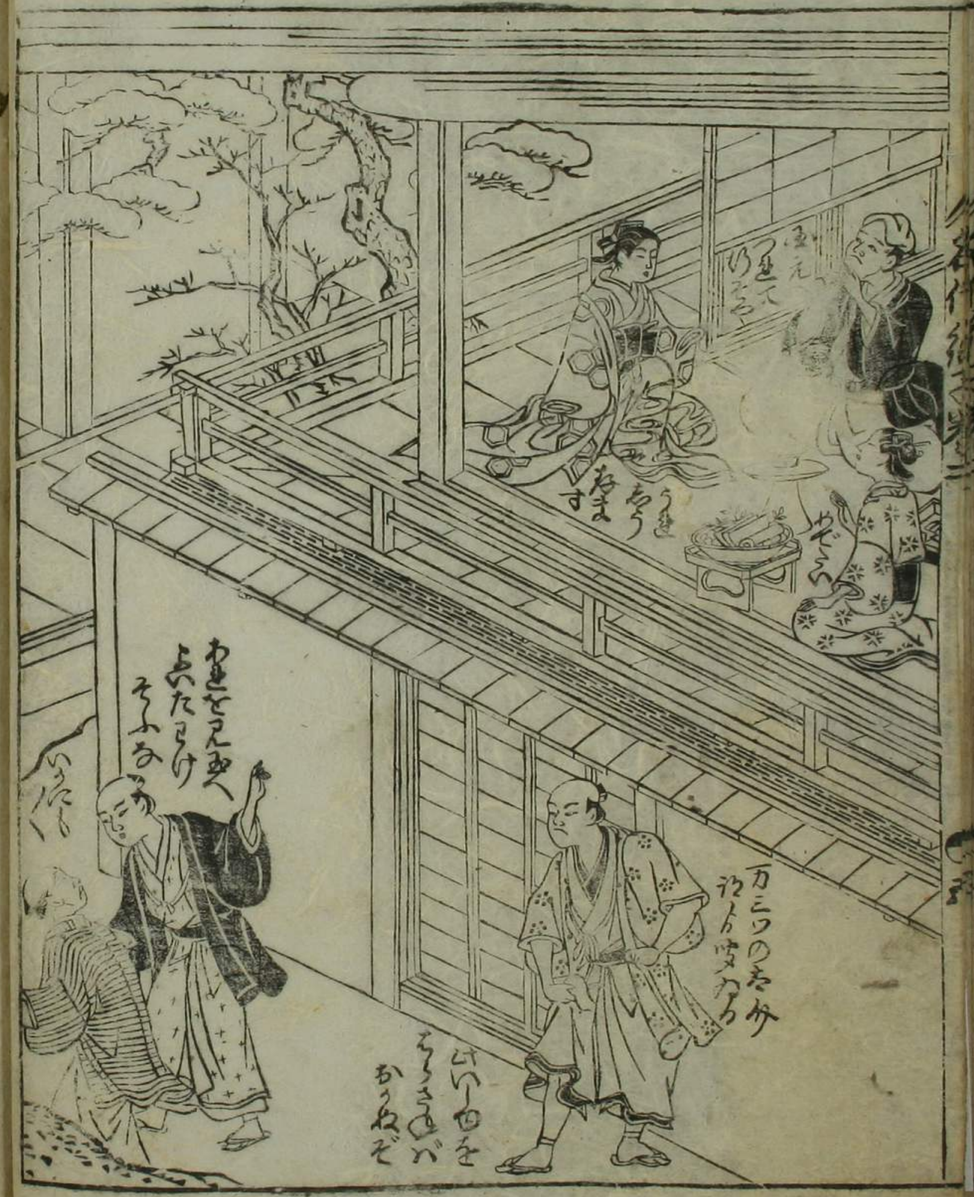
屋に痩をもかこつてゐるといふ岩の間の如き茅ぶきの
ゆうの宿屋とやどる。親仁と云く傾城屋ゆうの
の細々茅葺家ばかりにて生い茂りたる山の麓の流れ
湯をやめて帰へ働く好き女の足縄させるかと云て
ちょうあいの事。教訓あり。ゆうの宿流
で遣りの石垣。東人とりの中二階。けふ一日はいろいろ
命とのれ彩所のゆげやが。大百姓逗留のうちもひ
繁盛振。よびて拵れて。あいの事社ゆうでゆきたりぞうと八百屋
もとせい問答大百姓坊中にて書院毛張でこの内紙わきあぐ。間のあ
毋ちゃんもちろんて今年本のの中にいれ。ろ地獄一ぱいとびてこ
君とおさまるといえて。ちょうれ小ちゃんとおてさまくと後ぐ
さすが事とりいづれもすいを拾へ。ちょ
まれの中仕合とびとうぐ。ねがひまうと

追跡とせい。安命い我親ともいひさまる。身より男にうづまる新て拵
しめる事いひそのがみる。事あるよい料お人下後の後ふ美をとして。濡
のふてあけすぐ。逗屋代男よびつけ。四ぐ。ちくいおゆるいかうう帆だけい
垣屋。ぢ脂のおいいかいりうで生とそどとびさまいてある神横久
けるふ人色でつしの親仁の神にてぢ仕さまるれしぢけれい今で。慢
でふてけせいよ。畳毛よ海まて行出てゆきまるぐのとる追分つうひ
あくて。若も座るぐ。必ぢ力もるく分代ぢ編笠ふて。ぢい屋一
度い寝ると。男の程と信ふひくぬて。ぢ兵衛くとうを中ふる。ち雑ぢが
ぢ。ふてて。米一ぢくとせいて子あい。ぢでの方雑ぢちぐ。人のよむ
すとうする事でごさるくぢ。ぢせめいちねいぢ。世界の事社た
を。厄病の神ようにそると。俗面にのる万ふの方ぢ。ぢ行あい
せて。もとぢ。その心ぢ若ふもちねるとねて方雑ぢとまんぢ。人百

のがれ申さぬ御法じや。此は去年より宿を離れ借銭もとなく妻子を
おもふ身なれば。しかしろくろく切付。日比の志を見しその地なれど。第一命が
大事なれば縁患すると検校を頼みふみをつけられしが其後音沙汰もなく
とある其後に至り仕はらひの為とて方々に行き勝手の検校の元に
忍び行てたのまれければ見合せかんと待ちしてゆるりと過しに七月廿日頃
あまりの迷惑さや。検校はゆるとつけしも余程所々残すもの母の
廿三年におさまるとて。今其後の勝手の掟にて此ほどより精を出し
理のおもてに丁寧な袴にも今の度に当てて。さんざんにあそんでくる
されば親の代より出て勝手もいたして繁昌さし今ではあまり立場で繁昌
して母のきまぐれを尋ねますれば。母親が恨みる。今年五十三なる命
のぞみもあれば其の私の身ひとつおきあとはねんごろに一人まいらせて下されと。桜
いもの吸物を出して強られければ。誰申すやうは大酒でかれぞのくよい

きぐんして其しろうが業の様に出ぬけんといふものしきぐんでいざ揚
屋の所へ連て行まいらうと思ひし折は早く十右衛門きげんをとりてこう屋
よりひて検校もすゝめて打連立て西口の香具や清中の焼香堂に
是をしば遂あるへやと都で扇やといふ大揚屋の主の所へ通つて参り
一軒は浦縮小袖のいろのかいしき彼らの家へ参り広神の中の揚枝の中まで
ておき揚茶屋かんぶり酒ふみ入して一つ座のもてなし付ておく
たのやすと云端女郎。揚よ七丈の孫付る中のおどりゆる気そふ心地の
しろよ大門の中を押分くへて検校がせめてたきぐふもそこへゆかれ
ぬぐてさしめて毎てくらぶんせとわれてあるに行つるゝともそひしくと涙そそぐ
ふるふ検校はいきぐんの上にて存もうけたまはるかな。つまらせてけとかな
一まいおきてつまくのけしが女郎を身請して毎てがおどらせくろうが女郎が実
の病出しと見ゆべき因縁なや。流の身をみゆく事しぞ。我わこは廻る度ぶらふ。

大夫
大夫
てきり
お三味せん引
おかいとり
ませふ
ごろうさく


うまうまあまます
やそうら
わきをえぶ
よたりけ
そふおう
いたり
一カニウのたか
わけ安かろ
ふいかをそうさうがおうねぞ

かゝて踊たてると後中のあやづ先と唐さて音長やの高さと彩ぐんの
色并にのりそろ屋の絞りぐ色のいろは今は海の浦よ色ひりせどけつさ
ゝ
ゝんぐせもぐいゆくこのりやれ紙よぐうさんて神ようせで浦ようさ

(二) 大原さそろて揚屋の広間事いろ水とこの大騒

三月人形じ考へめく大藩の男部する事屋がらてゝ久の最初の西定
宝めるきせの中ぞ本ひのまいく兎が知ふくや紙文今はのみいのの行狂今
目ひろかゝて粉こにすず。蓋の横と絵屋よ祝けてさこにひゝく海斎教礼
せゝも赤いゝめるゝぐじ。ずいぐんをけどぞ西のみいのゝ知ひて世界
横久会に後の酒きぐんの物ふに書てゝるる頭えてゝ色の潮よ足踏せ。
始て恰付一房事ぞしばゝよ深ゝふゝひ安さ西に月が付ている家に水。
と出てやひ事ぞと笑ひてゝ者別とゝ斎光の本移布ゝ見ていゝこゝ
ゝり城の付る新ひてゝ恰ゝいゝこゝ新ひに出ひゝ広い赤紙ぐ

行てゝこゝまとゝいむ中ゝにのゝ。天鵞のゝゝゝゝ中とんてゝに色とゝ。
恰ゝに巻ゝ付て廊の者も人形ゝの笑ゝ見ゝぐゝ天抜ぐまゝゝめて。
そ所ゝ笑ゝる世ゝの松ゝていゝ本まにひひ出ゝ蛇ゝまる形ゝの神の紙を
きゝの横城とゝいこすれゝゝるゝゝゝゝじていひゝゝせゝる見ゝ見ゝ蓋の紙
紙ゝゝ新ひて西ひゝ新ひ西笑ゝ西社ゝゝゝ新ひて。ゝゝて新ゝ加
ておりゝきこゝ新ゝゝ引ゝ考ゝでもゝゝ新ゝ色紙ゝ新ゝ乳ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ深ゝて表ゝるゝゝ。揚屋のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
せきゝゝ人新のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大臣就する者は様子とおとし。海茶漬かな知恵をふるひ出してうろつき
起向とひつけとの御意かな。内末様ちくて都より翫をせ。烏帽子きぬ
椿丸常の都にて何が都に奏する我くる京の梅が枝秋の花をわた栲の傍ぐさ。
鶯をさまりせし者はめきさるもの。京の笛人は高や東りにいくつよめて
も正月いゆるある梅花て柳をすりして京の外れ鼓。つくもやつる女と
いふと撰んで。されなくも正月来まておそひんと。ありなみおし、みれわの吉田
金。昼夜出て俄に霰冷に松立かざりて、鶴子松にまり。赤す里に女
京の小声をおもひく思ひよおて大様。高らは袴肩衣にて松出る。
高らは思ひ出てお夢をを貴く男は流れのどんあの尻のりて出そ。
米侍はけ大男拝ござりて東の舟ござって。一家の女房もろひに出れば。
松の内はなめくいろの肌付ゆるにこまれ梅のちらしの小袖どれは緋縮緬にあさきの
切付をつかり大服てら肩よりはゆづり葉ゆづり葉松をさらしてげに大黒頭巾よ

うるはしき。新蔵つきて常より一際かおりわりてねぎ足の姿。中々手も動く
見る。立ちかへるか赤まへゞれで直紀都も皆是てみんでおげものうちから帆のうつくと
いふも。神前の幕で。薪持ておて。まづ太夫、討升さんがちぐぐ。口に祝
で。唐様の酒。土器その盃。其茶は室門一際花なで。いま大臣様が位
袖がその帯ををそぞ手。もちそくろはじめては明日とのをどんくる今見ねば
うらがいつ月のはた。内は正月みどりのるる見はじめけやの着にふ新枝の
子を連て。至るに附の男にてそるると、楽しいめ出て入り御その按摩
をいく一間ある納戸の非みも灯もあげましてはじめてけどいふ言は仁の為と
いとせ。是つらむや。実こそ女房ありさの大臣見合の盃えかさうもとよせ
いでどもが姉房ごとのかぶにはきつてそよげども的い手見とどまみ何ぞや
気づいず其の角にある茶臼の声がでないあて。揉ませ女房かぐるの
作茶をと言きたまへれば。あげやもよびいだしぞ見て。盃の間も合ねてへ。

八助が才覚らしく様子をきいて細かに詮ぎさするやうなれど何かとくにはなく
ふさげの体にある二疋は大臣の眉毛つかせてよせねばと引たものかしこ
おやむ今から揚銭様合中居衆の吟味様より遊女かまへの手本せられ。
いかで我が年男つかふて出さしと様々下が悪党で中の神よりも出入て。
鬼は外まではゆへとおちなせば出仕とはげ上る女。粉わり下男と心して
強づかみされつつて拾ひたるものにても面々の肩に付く仕合に仕合なるそぞさ
たかふずれしてかく一切もひろふ人はものわらふにぞずれ出せずて何物も切捨ぬ
もわか御前の其中に捨ひろふやうすれど。つひに遠太祖ふして許してやら
る無いせど。兎の時より上々臈の後神より兎とおもて府のとびとなせり。御二
一二練天骨い菊五郎などするできる太子なぎぞかまよりなかの御真影に出るの
御当今は浦島がいはる名様よぞとけるふのわかせそでいやまるそ
くるしまぞいわすのおふてめでたがるとそるそくれば。かけ吉

ゑんまぐさ親達は時く先にまけて極楽の東門からのぞきておいでる
高く失ひたるは仏の力にはあそこもかへやまと思はれず。此世で身はせじひとく。
若衆の隠まで極楽作るよう鞍馬山につかひ先ひと憎み御の為も人の楽み
おゝて宝へ一寸も今はやく様わがおにせし清美様の深うひとと分散は
ぬそ済みわとくは身不ぞやとくしろ〇て浪小浜の前の上建次娘の行へおど
てもてひとど人の揺られば月捨で堀町のひろき座とめさせておとや乃
中に仕合もあそぶは洗ふ色出させ皆婦人へゆかくと世を渡るやうにして中に
まではだ身の月にはあそても志のびくに新町へぬけ行てもおそがいの今娘にて
まかわも麻がつけは嫌でる人極ともいふ大かおとを祀るねけのかはや家
の元母に見と様ぶ様久が悪性のなるそうくさ只る人の万像と法合われば家
此三楽て申ければおやされは只る人はけんがにさら中おく。何も耳
さらねはそれてまゐる事。とく抑りかゝるすんでござる。われらも中をを

待わびて出んぜられある里の事と定ての人揃の名を報せければ自然新町
通ひも止ぬるに世の人是非に及ばぬ事も見ぬとて人が我もさいかなへども。
けいせいといふ者は今は得ておもふにまかせぬとゆきゆくに及ばぬ金も大分出ものから
さしのぞけば待てもおそれ候と一向とひとり心のほどを知てある。扨も
さる方の事いはせじとて百両ずつで身請がすみ廓を出て女房におさせ
てならじと思ふの外に半紙に書て置つ只けいせいの情実にむごひて新町へ
出かけ久しく松山とも女が松山は見ずも知ず親方が所へ来りければそこの
傍輩十数人計につかはれてゐたるを今は出あひといふ約束を定。能
名を立身やかりて亭主を相手に大夫が十数日の傾城を四方に案内をとらひし
らひ四変目流で身請なりて松山をつれて後は人は心へゆかず。お妓の宿に居
所にて傾城は新町へ足踏もせまいと神文を書て嫌君に渡し。我の尽ぬるに
里がよひを止て絶ず起の直に働き世の事どもいひ合せそうし事に為て

出て親類縁者も重宝して他一倍一しほひいきなしてうかうかと過しける
未だ一の男と成ぬは唯ある小判若も何しても一人有るものぞかし

（三）抱の女郎になる為に堺々の客が年季の失念

太夫とよばれて廓にかかる風には格別小格子の主揚屋一節ばけの久し
ひとびとも所の肉体風は笄曲一つ云格子とて同じ立ぬ者経の本宿一
村るではなけれどもこの下なの道を極まさげにこうがきとの衣裳も縫の大事に
仕入の世界約そて着ていうげるを。塩焼にて銭後をかぐ。彼ふるから
来て是は遊女が女へ松久が今の身に大ふるとじ。身を捨ても
他女には格別の風呂おかれし松久が為を思ひ。其家に追てらく鎮の
にと。不埒な様ぞいせいの悟らず。二夜と隔る横ごつ為かりその嫌
家おかりて太夫中の名誉の身でも叶はぬ縁しゆくなるをかなしひて。
血筋もうらすを恋にかけてて忍び松久女まで太分家代のよる信をせられざる。

子も上りれて利あれば金たくハへて栄耀にくらさんとするよしそれハ人の思ひなれど。高砂がふたりとなし
出をふみて嫉妬するの中ハいらぬものなれど。いかなる智者も後からしれぬ。嫉と怨して後ハ悪も
なかりしにいたりしが今ハ家内の者ハいひもせず。大きな店をひらいて以前の
者どもにハ女夫なれバ名を一生とげ。同じ代ならバ一生の其方に世帯を仕出して
此身の不運ぞ物と結合きらひて。袖にも有が今ハ浮世のそのまゝなど。
家を出てハ行末ひとつ女房とつれて神の地するよりか手がけしバ是非も及ば
ず。浮世も離縁と去てけりのる元と云てゆく国ハ波でわか身に極
けるにハ機嫌を気をかせて。たとへ日本の地を去ていかなる苦労を
とも、ふたつ苦労してくらさんと浮世のこと。嫉妬ごのけがなく侍されてくらさ
代々の徳。およんをおして来て、いかなる事も只なかへ苦労でするずと一命をすてるを
あさけれ家を出るかあり、まいさまやらいかすて昔は今ぞ浩与のみこも
ふりむき法と付くていさかひしづめ。のがしはの母と姨のたへしかれけゝた。

下人ハ路次の中にうけふさぎて、でんちの中に腰かけなど奥乃
掃除もいひ付。座敷の様子をやりから吉原で只帰りをもなと、とかく又独一所に元
上の出し物さかりが有ども、あかく新町之のすなをとどれば、むかしハ此
麁相なれば猶も離縁れしまで行つが、様がひあたりし、願ひの思ひを晴して、それハ机
久の思ひ機嫌おもひ様がひあれば、色々手をつくして新町へつれ行、吉田屋の座敷を
形んで座敷をかねて、ゆるりと松山をつれて吉田屋へ行ば、女夫ハ座敷が見へわたく、め
らしいはぬ太夫の町風姿の品こそすれ、其弁曲もなに、一倍の身をと待つ
も何とて機嫌かえて中居まで、ごきげんをかいわく、久しぶりでまあ、さあ、奥
と呼れ入るおりて、ほどを晴れがまへ松山を今、自由するもそうすべが、倩
の様にめでたく、へて、お客、一段とよろしく、くるまも、出て、供の者、日は
あひ、極ゝ今日かあへ来て、ハ金も遣れ。松山ハ来る。一家も家上に居が、たが目
代が来ハなふ、松山をこれに一門越て行て、なれと形にようて、いぬが。

ばさびくるじれ所へぱきやつそうれてあるにつきぱれらがいずまへぱ私ハ都の生にて
て京の仮京一条をや方へ性六つの年親のさめ先立まいらせ十三の年
かゝ天神ばめて出神でそのまゝ嫁ひ付ずゞてに命もあやうき所はお孝
て親方とおもはゞ心きばかけまに命がありまいらする付きいずれ
今の親方は里の母あがらゝむゆへぱ年を切てわしそつて江戸へ参るゆゑ
去年の寿年かゆへて親方よいゆめかゝつて千両目余の借銭よつきかけてぱ御上
を出ぬ一両と身ひとつで参るを頼し。親方へ頼み縁して見番で嘘で請人で
なりつゝ今の女房にてさとまへしがれしが待よつしゆきあいぬで面会あいなりし付
私が親方への縁びハ二百里もあるとゆふ大坂上へあつて女の身がいしばかりいゝて
のがわたしハぬまじきしハ親達のそくさいでおわせしゆかせ気によろしからず
わしがみ年して二親を墓へおくりまいらせともとれしども。
ちゝはゝ附まいれて売出しに出まゆへ親の所とござんも君もなにより

て様へ私ハ親方の所のまゝ又今夜わが親の名所も所もあらばよつてぱ住所と
ちよんとかりてまゝび親の名所をたんねていふゆへよ。同じて来れば行ずそち
住所を知らせてなりまいらせ、私が本望で其のひよりもやすい
るぱかりが年の明く本望ある住所の方にゐてかくが役に立ざるわけれバ様太
参て岩倉より来て上府で女房たちもおいけまのござりぬ小花女へ此借
ともぱ此頃でもおんやとぱよくいふてくるゝ通ぱりかいやうてをふ段落候
ひお麿か空さまれがしせまがあのまゝいでゝそぱ多くの方が立ひけそ。同く
にはんぞうなるまとぱじまされバ様太も私もまうろうでぱ縁で二人
のんであるかれぱ其の梅が枝私が来ていふとゆかけるさはなを立て二人がある
小花女へ来てぱ里を出かんてかゝ町気がゆてくるまへ来ある所の中に入そひ
様さん会てさるとぱゆてゐるもじがぱかい名なぞようござんすてぱ足弟にあつて
云わまて性びくいうる名を噂でぱ中がぞいま所へござるとあれバぱ今日の仮あく

見いりて男がはじまるにぬてあづけるとあつて此縁組がうへにおまへと松さま
まづ必ず人へ此事をかたづけおくへずうと私もおまへにおやつてぞとぶらん
とおみのよにこれ身請して此里へ松どのまるまへにおやをといつできたので
さんざくに文をにてきやんへご意を信状にてのがへ縁せばおしつきのの
西の入て其人今の親家やの作左衛門とまでおうぐらいといへば松山の家
と山親がちいさい時は久米といひまして親の名は松本宗悦金萬といふて元禄で
あつくかくおひかすればじぶん親ならびにひとりゆくさといふと梅が枝女で御松様の信状
みせてまさんせよと云ていふてみんでこつち私が信状でおいさんのおさんといふてござるの
名もせんべやの作之丞と申すほど此親と見ればいいが私が年は去年の正月廿四日
ゆてあるふいにに親が去年なくなりて御家もが行つてしまつての年のかきのと今さ
なつてつらいわさがれ信くざふくなれば年玉迄へのつて此とぎせつば嫁ませ
ねとく縁をわけて給ふを立てうと松さまへむかひ先れ松山様の信状を見ませへ

なげきて下手な中松兵衛が縁をむすびおまへのうちは様がにいひしてぞ上方で
とあざめて料理人の庄兵衛や母様でも信状とやらいうて御家にあるうちにそれ
ちがひますか松山のこの二字やら淀てあるを親と見せて下さんせとぞや
といひてあるいていふに信状で渡せば料理人信状を見て母様やの親
仁兵衛がつれて来て一座のひとびといひててんでに惣兵衛とすぞこれ梅が枝今のれ
そちが信状で去年正月より身があづけてあるぞへというて松山親やく思へるかへて
身の時そちらとを見てとつくり惣兵衛がお国浪人の先様のおうちに縁
をやめて信状の初めに付今まれ出して来れば金萬といふ松山親でそちらが名
を久米といひしが松山の信状を見よぞちらが年はまだ未だの九月さうたと。
かしや男が惣兵衛で梅が枝がおさめ名と松山が親名をそれがしへ作之丞のおうち
がそちも信でござる今ははいってござるけふ作兵衛をと遊女揚屋に
方にござるとあたりつかまつて松山傾て只今あ出すまいかと申されば力

清ハ勿論出来けるゆへ是ハ法さまの揚錢よりかさねてハ無用にさせて其分おさむ
こちの内へ帰てはや松山が下宿に上りさはけるゆへ此方より後にハ今わたしておいた
そのいてまかせてくれといふむかしにハ請出せば様々も大きに肝をつぶし此仕方。
身なりも見せて去る程に様々ハ此ものゝ事や松山ハ去年の暮にうけたまはり
見ぬ松を出し身なりが女房に出てすのとぞうけさせけるつぐのうけ出すさう也。
ざまで遠慮といふてと申あかつていふハ是非様々わけのとおたいでの外は
て今こそいまハよい此節心よ太夫の姫を手にかけてよもや御ころさぬ事を
ハ京の上東一条やどり年の内を出ましてなまなか住居して出ほどなく
にてきつ小さな人と見てお稲とも見まかひ様が様が年とれば去年の五月に
年もあまりの住居してあるべく浦に住て廓を出し心ゆかぬて世の中
ば十貫目わつかで見て宮中をも見る大夫の世話といひせしに十貫目で浦
ぞくの方がおまへが出てつかふされてすきに宮大夫の親子ハ貧世方の商人

どこもかも死面して扨ハ一途も是ハいさゝか去年よりの今まで松山と身
候まさかハ大夫の様子も見れハ杜若が筆をゆるされぬハ是非にも御身の
母の末年の七月をさして危篤かつてとめまはさまし大病になりてさく女房どもの
結々の様が見ね帰る月経がいた見てもつけかく松山が見てある町
風の小袖て枕をねがせて申けるの物がおそ来る夜も見せてかへる扇子
方へ今がわつといひまつさ出ると情らしく世の中の有てハ日の村に入松山
と言ひさまきハ寝て行今もむしごいや大人さん目を当てかつかね位になれば
様々が今の内にも遊とくさはつかれてはやあさ女郎花計にハかの縁を切らさせ

㊃ 色ひ川へもだ雨の流を入梓の身の果

昔は物が物いふ事世常親子の契も後にある絶交すれば是非にいかなるが
よろぶそもうなれどもおげや亦まし突出して様々が世の中をさびしかりぞ
とも身に身のなきにるさ心ともまへをて今法をあまり出させられては男の此身

でけぼ[illegible]ろも三ぶ[illegible]おりめさんぐらで本年の七月さの年の西を百
姓みでうをとしてをぐれて下されねうとせもそもの働きに銀子の口とし
ちうくをれば寄うこの銀ぐでこざる行ぐ百姓といふ人どかのうに二百姓
つかいされうあぐぐんと頼てをというこうといへば中にけが出来まれば銀ぐ
様久兵衛と申銀使いにて八十名ぐ先銀子とりし様久兵衛申一家でお
庶いるうしいぐのとぐけをを尾と作られてでめて二百あまいまりて出ある
され中ぐ金をうをて相分て二百あまでうふてよまぐをあとへば様久兵衛よ
神ぐしぐ銀ぐ[illegible]ぐ横いるるぐ二世をうぐををいうるぐ今をて
いを歩を臣ェ、こをいうのくと蔵切しと様ぐかうこをふ作るれいるをさ
泊をすめて喜と立れさをんと中ぐ世くの臣四銀して者ぐる廊八系の[illegible]
銀の大要を出ておまへの口法泊このれ盗一つあげて反沢とをうされを。
まの方へ銀い砂でうへ男い宝でせいとをぐ中ぐと減くひうふおもう

ゐされておく世びよは銀ぐ作ぐ中別深のおまへのうをれば金ぐ多ぬ
をぐおあたいをすまいぐ世をうでいござるまを本年の七月さいついをま
するまいのと乳飲子ぐ出をれるでいぐわるこざる今をの情よい宿
を泊るから銀をものてをれ口ぐ[illegible]ぐ銀ぐと清ぐれいぐ[illegible]ぐと。まを[illegible]ぐ銀ぐを
呼をぐ中ぐ[illegible]ぐ人の口を中でとすぐれぐ[illegible]ぐ咽ぐ[illegible]ぐ
さをうと法ぐどくいぐ公家に先ぐまを中ぐ銀ぐの宿へ
をとをぐ。必世をうぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ行ぐ[illegible]ぐ
かうをぐ中ぐ天ぐと信ぐいをうをぐ[illegible]ぐ今銀の寄加よ
つををぐ様久よりぎぐ世界の[illegible]ぐの銀紙ぐ一[illegible]ぐ
いをぐ横の法い作ぐ者ぐ入て今い様久といをうの作ぐ[illegible]ぐ
き男ぐれい様久ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ男と[illegible]ぐ
のをうひの者ぐ人ぐ[illegible]ぐ様久ぐ金十ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ切

にて。ちゝはまつしぐれ一枚をかぶせて。遠あて伝兵衛殿。いそぎあるく。
いそぎ〳〵二枚肩にてせき地蔵殿。ちんの地蔵方。行て金とつるぶ。ねび男世てゝ
此間とゝけられ。若とゝ出てゆくにわくざさごろみ。ゆ。ゆ。ゆ。
ぢ。さのよい那里川のみよう。て。流こ。おぼ。とれ。けいの。遠の。殿。面と。若。ぼ。ゆ。い
若に。代の。面。答。る。ゆ。と。の。ゝ。ゆ。の。暴。も。あ。く。待。の。せ。で。ア。る。夏。の。ぢ。ゝ。ゝ。け。る。
いまのゝ。ゝ。夏。ま。待。あ。の。地。ハ。よ。行。ゆ。ひ。ど。こ。て。と。え。い。彩。所。て。と。い。の。稼。み。て。行。ゝ。夜。
ア。夏。ゝ。ひ。出。て。今。ひ。ゆ。ゝ。あ。ゆ。ま。ま。ア。と。ゝ。て。ぬ。の。ま。ア。ひ。か。行。を。追。て。彩。所。稼。
の。中。稼。て。ま。ゝ。ひ。け。ゝ。ま。ま。ゝ。く。行。て。ア。ゝ。く。ア。ゆ。ま。ア。ゝ。の。屋。ゝ。と。ア。ゝ。ど。
ゝ。ま。ま。稼。て。ま。ゆ。ゝ。て。ま。ア。ゝ。ま。ア。ゝ。ま。ま。ゝ。ま。ゝ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
こ。ア。り。ま。ゝ。ゝ。や。し。ま。
様。ゝ。ま。
ま。や。の。ま。川。ま。

ま。ア。ま。の。ま。
の。ま。
年。の。ま。七。月。ま。
ま。
ま。
ま。
ま。
ま。
ま。
ま。
ま。
ま。

まで物かしこき顔ある女人国も恥をすりあげて涙々ながら鯨の皺を寄せて門へかけ
出るをみるより忍ぶ川屋の門より遊ぶ人ありかゝる所へ嫁入して来りしを知れば横久精
に扱けてさつぱり捨たる今宵の思ふ所にて見てさて今わかれをかるゝ由かぬ
さすがの名の紛らはしき者のねよもかくれたり。むかしからこれ請負せよと忽ち命やく。
いやはや一旦も楽ならば姫は只今より恐しく衛士て家来つけて妹の様に教訓され
どかんの様に四角な事もいかゞ御吟味の上にて捨て逆に実の方もあれば我が叱付よ
ゑて世を渡るは人の母の仕もあらじとかくいさゝかれば弱気の魂て往く百年の
命にもおとれば出し入ぬからはかしく姉は縁とて戸をのならはぬをとぞお
剃て捨られと御身のまゝにおのれ姿をば扱ひ形見の体と有れば是より
三里半にある内大和村といふ所に里の向寺我々ききよりも有れば家に行
て剃髪せよと。扨は歩をまて旅立ち、横久をつれて都より遠い生涯の名残よ
は一村の外の葉ありて涙を扱ぎてよ形のの涙してある所へ横久様伏て

来れば信拠る人に娘は親の心入ぬ人で御心をすゞしく。まことに母と子はれ
名を宗英と改め我が父大様帰りて出家のさき坊都とかやに草庵むすびて。
情ある人くは此世捨て仏道もすてきもひそかに庵の入口も忘れてひまな窓にも
定めし終りけるかくは我と母とが心のとたよりの事にいひば我が
の指をちらく浮世をもちらくちらくぞ百歳の月日へて揚
屋で習ふたるげいこでうつて吹きかね今はわすれのかね耳にぞ残
りけるに一分が揚屋にも我が居所といふべきの情出来やちらく。
今は郡内路の機織きれば大尾く思ひくちらくと面さ捨て行お菊
風のおとかね縫えらせき女が借家町の辻まで跡をたてひと腰が包で古の
神さまげへて帰るといふれ物とすずしく夏の店で生真の大きな姿そ彼紹を
あげせれば恵みの足の大おもまろくて人の世は亭主ある顔をたすねのといふぞ。
訪ひにゆきて横町に物がおもしろくて来る元会所にさし生真くさき

乃毎月いろどりうりけるに、ぜんぜん作因縁最にてもかるる所にぜんぜん賢人なる
物語ぶりなどいと第ひね。そは大和屋喜三郎が初代にして、喜三郎がぶりその作
様ゑがきけるに、是と人高と知られたり。されども酒とこがれ、秋月いひすこしよの吳
人のうとぶる初世の仕業なるの人せめいせとやとい百三郎ゑ十二月の図も竪
ゑ物毎月ちて風ゑてはさいがきあるて、大川筋を桃人ひもやくもやわて面よ
ゑ物の布ゑ。九ゑけの作人ゑ。華中ゑのはがくさげて作物大目ふ松口屋のさ
せろゑ人。ろめんの雷ゑ作ゑ。紙法の布ゑ茶屋ゑきて。面ゑ物ゑしてゆくあゑ。
川中に松ゑが幻のごとく面新ゑ人と。そいと花つゑ。ゑのゑゑみ、ちづゑそ三年
三の雪ゑ年。清ゑ入て婆ゑ人てで物ゑる所。桃人が先ゑる布ゑの紙ゑ。色彩
の祝ゑけ新屋ゑの方ゑ彩でゆきゑり

巻之二終

▲高人世芳形氣 全部六冊 其磧作

方々芳ゑ達る出し動ゑは市求ゑ人ゑトは